
本気の初恋

翳鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本気の初恋

【Nコード】

N1379BA

【作者名】

翳鴉

【あらすじ】

幼い頃、幼馴染が初恋の相手だった少年、雷世。そして告白したが、その時に振られてしまい。そのショックで幼馴染と離れて10年後。

プロローグ 1

恋をした。

だけど、俺の恋は普通じゃない。

幼馴染に恋なんて、ありえるわけが無い。

自分自身の思いを押し殺してずっと一緒に居た。

だけどもある日…。

「お前の事好きなんだけど…。」

言ってしまった。

「ごめん。同姓はなし。俺はお前の事幼馴染でいい奴と思ってたから。」

振られた。

自分自身が悪かった。

だから諦めた。けどあいつを思うほど、俺の心もボロボロだった。

そして、あいつの目の前から離れて10年後。

黒咲 雷世

20歳の男。

生意気で冷静？で結構親切で優しい。

褒められると単純に照れる。

小説が大好き。

金持ちの一人息子。

守川 幽もりかわ ゆう

24歳の男。

生意気で横暴でいじめるのが好きで案外優しい。

小説の編集者。

10歳の妹と二人暮らし。

橋川 紅葉はしかわ もみじ

20歳の男。

明るくて優しくて真面目。

雷世の幼馴染で初恋の相手。

1話 幽×雷世 1

幼い頃、幼馴染に恋をして、思い切って告白した。

だけど、振られた。

そのショックのせいで俺はそいつから姿を消した。

そして10年後 。

「早い！展開が速すぎる！！」

と部屋で小説に文句を言っていた。

俺の名前は『黒咲雷世^{くろさきらいせ}』

小説が好きすぎる男。

「はあ…この続きと後金振り込んでるか見て来るか。」

雷世は家の鍵を閉め、本屋に向かった。

そして、本屋に着く。

さっき読んでいた小説の続きがラスト一冊しかなかった。

「はあ…こう言うの読んでる自分がバカらしい…」ボソッ
ドンッ！！

雷世が誰かとぶつかった。

そして本を落とす。

「痛ッ！…」

「悪い！大丈夫か？」

「…あんたこそ。」

雷世は立ち上がる。

「ん？恋愛小説？」

バッ！！

雷世は自分が買おうとしていた本を男から取り上げた。

「!?!?。」

雷世は顔を赤くした。

「それ。。」

「なんだよ…男がこんな物読んでたら駄目なのか!」

「違う。それ俺が担当した小説。」

「!?!? あんた、もしかして小説編集者?。」

「うん。ってこれから時間あるか?」

「ある! あんたに聞きたい事がある。ちょっと待って。」

雷世は本の支払いに行った。

「あつそうだ。俺は黒咲雷世。」

「って、お前気軽に知らない人に名前教えていいのかよ。」

「今顔をあわせた。これでもう知り合いだろう?」

「!?!? ははははは、お前変な奴だな。」

「変な奴っていうな!!!」

「俺は、もりかわゆう守川幽。」

「守川。」

「何で苗字?」

「いや…なんとなく。」

「ははーそうかよ。」

そして雷世と幽は本屋を出た。

「あつ…金…。」

「俺がおごる。」

「そっか? だけど返すからな!」

「分かった。じゃあメモってるよ。」

「分かってる!!」

雷世は幽の軽い挑発にムキになる。

可愛いカフェのお店に入る。

雷世はさっき買った小説を開ける。

そして読み始める。

「小説、すきなのか？」

「あっおう。」

「集中力が半端ないな。」

「そうか？だけど、守川が担当してる小説かぁ。」

「どうかしたのか？別に他のと変わらないだろう？」

「別に。俺この人の書く小説全部持つてるぜ？」

「?!...それ全部俺が担当だぞ？」

「うん。だってこの人の書く小説。面白いんだけどちょっと展開が速いというか」ニコツ

「お前って結構、いい奴？」

「そんなわけないだろうが!!」

雷世は顔を真っ赤にする。

「照れるな。」

「照れてない!!」

雷世の携帯が鳴る。

「はい？」

雷世は電話に出る。

『あつ、雷世か？』

「???どちら様？」

『俺だよ。紅葉。』

「!?!?。」

『久しぶりだな。今日なお前の所行くから。よろしく。』

「無理！俺今日は家に帰れないから！」

『何でだよ。お前仕事とかしてないだろう？』

「お前に関係ないだろうが！ボケ！今日は誰かの家に泊まれ！」

雷世は怒って電話を切った。

「どうかしたのか？」

「…あつ…守川！今日家に泊めてくれないか？」

「いいけど、俺の家には妹が居るぞ？」

「それでもいい。」

「そっか？ならいいけど。」

「サンキュ！」ニコッ

雷世は幽の家に泊まる事に。

「…はあゝ雷世って本当に照れ屋だな。」

2話 幽×雷世 2

「……………」

雷世は暗かった。

ずっと、顔を下に向けて歩いていた。

何で…なんであいつが…追ってきた？俺を…。

雷世は横に首を振る。

「大丈夫か？お前？」

「?!…ああ…おう。」

「もうすぐ着くぞ。」

「分かった。」

つて…もう何も考えるな!!俺等しく無い…。

「着いたぞ。」

「……………」

雷世の目の前には大きな建物があった。

「マンション？」

「そうだけど。」

「そっかーってでかいなあ〜」

雷世は棒読みであたりを見る。

「お前、あんまり驚いてないな。」ニッ

「別に…俺の家もこれよりデカイしな。」

「マジかよ。」

「おう!」ニコッ

雷世と幽はマンションの中に入り。

幽の部屋まで行つた。

ガチャッ

「お兄ちゃん、おかえり！」ニコッ

「ただいま、唯」ニコッ

「?!..」

幽の家に入ったら小さな女の子が出迎えてくれた。

「あつ、初めまして。守川唯もりかわゆいです！よろしくお願いします。」

唯は丁寧にお辞儀をしてあいさつした。

「…俺は…黒咲雷世。」

「雷世お兄ちゃん！」ニコッ

ドキッ

「!?!..ああ..」

雷世は頬を赤く染めてなぜか焦っている。

「唯。雷世が照れてるから。その辺な！」ニコッ

「照れてない!!」

「そうか？」

「子供の…対応が分からないだけだ！」

「ふゝん、そうには見えないけどなあ」

ギクッ!

「.....」

一々むかつく..。

「じゃあ、私は晩御飯の用意するね」ニコッ

「あつそうだ。今日は雷世が泊まるからな。」

「えっ！雷世お兄ちゃん泊まってくれるの!?!」

なぜか唯は雷世が泊まると聞き、目を輝かせる。

「…ああ、理由が合つてな。」

「じゃあ！今日のご飯は豪華にする！」

だから、お兄ちゃんも手伝ってね!!」

「はいはい。」

「って、守川って料理できるのか?」

「出来るけど?」

「そうか…。」

「なんだよ?」

「別に…。」

「もしかして、お前出来ないの?」

ムカツ!

「?!…できるわ!俺をバカにするな!!」

「じゃあ、勝負するか?」

「!?!…おう!やってやる!!」

雷世はまたまた、幽の挑発に乗ってしまった。

「ってお兄ちゃん!雷世お兄ちゃん、お客さんだよ?」

「いいんだよ!」ニコッ

「もう。しょうがないなあ、雷世お兄ちゃん頑張って!!」ニコッ

「!?!…分かってる…。」

雷世は少し焦っていた。

…ヤバイ、俺料理できない!!…って人生で料理なんて1回も…。

「で、何料理作るんだ?」

「唯が決めてくれるよ。」

「料理というか…林檎の皮を向いてね」ニコッ

「勝者が敗者に一つだけ命令を聞かせるでよくないか?」

「…分かった!受けて立ってやる!!」

幽と雷世は包丁と林檎を持つ。

「よい！！スタート！！」

「……。」

雷世は林檎をじっと見ていた。

どう剥く？俺いつも林檎なんてかじってるんだけど…。

雷世は幽の方を見る。

幽は器用に林檎の皮を剥いていた。

「……。」

「雷世？どうかしたのか？」

ハッ！！

「?!…べ、別に何でもないし！」

雷世は頬を赤くする。

何、俺見とれてるんだよ!!…相手は男だぞ…。

「……。」

雷世も林檎の皮を剥いていく。

ブスッ

「痛ッ!!!」

雷世は包丁で指を切った。

「大丈夫か？」

「大丈夫？雷世お兄ちゃん？」

「ああ…大丈夫だ。」

「チッ…。」

「!?!…。」

幽は雷世のきつた指を舐めた。

「唯、布とかある？」

「あるよぉー!!」

雷世のきつた指に布を巻く。

「これで大丈夫だろう？」

「…ありがとう。」

「お前、料理できないだろう？」

「！？…悪かったな！俺は不器用だよ…。」

「はいはい。」

そして、料理は出来て、皆で仲良く食べた。

それから遊んだり、勉強教えたりして、一日を終わらせた。

「……。」

だけど、皆寝ていたが俺は起きた。

そして、携帯を見た。

「！？…。」

カタッ

携帯を落とす、雷世。

「…紅葉…。」

今夜12時に　公園で待ってる。

「……。」

会いたい…会いたくない…。

だけど俺は…。

ガチャッ

そのまま行ってしまった。

プロローグ 2

「はい！！皆さん、今日も元気かな??」ニコッ

「本当に、人気だよねえ」夜昂やこう

「マジ、それ思ったあー!!」

人間は大嫌い。何年経っても、好きになれない。

それが俺の、運命さだめならば、しょうがない。

そして、ある日…俺に不幸がやってくる。

バンッ!!

時間とき 夜光やこう

19歳の男。

生意気で素直で極度の単純バカ。

女装している。

大人気の有名モデル『夜昂やこう』

人間が大嫌い。

煤城すすしろ 黒弥くろみ

23歳の男。

口下手で極度の人見知り。

人が居ない所だと、性格変わるらしい。
マフィアのボスでなぜか日本にやってきたらしい。
雷世の両親と知り合いらしい。

3話 黒弥×夜光 1

カシャッ

「そうそう、もっとポーズをつけて！」
カシャッ！

「もっと、笑って！」
カシャッ！

何が楽しいのか分からない。

ただ、楽しそうな俺を取ってるだけだろうが。

「よし、じゃあ休憩にしようか！」ニッコ
「はい！分かりました」ニッコ

俺はただの、操られた人形なのだろうな。

「今日も絶好調だね、夜昂」ニッコ
「別に……。」

女の子の服を着ているが男である。

名前は『時間^{とき} 夜光^{やこう}』
「……。」

俺は望んで、こんな格好や仕事をしたくない。

ただ、あいつが言うから。

「夜昂ちゃん。今日はもう帰っていいよ」ニッコ

「はい。今日はありがとうございました！お疲れ様です」ニッコシ
夜光とマネージャーはその場から去って行った。

「俺、もう帰る。」

「えっ？これからまで仕事が！！」

「全部キャンセルすりゃーいいだろうが。」

「ちょ！夜光！！」

「……。」

夜光は女の服を脱いで部屋から出て行った。

「……だるい。」

夜光は公園のベンチで座っていた。

世界はつまらない……誰か俺の理想をぶち壊してほしかった。

夜光は夜までベンチで座っていた。

「夜かぁ……もう帰るか。」

「ハア……ハア……。」

「ん？。」

「ハア……グッ！」

「！？……。」

バタンツ

木の側で人が倒れていた。

「おい！大丈夫か？」

「ん？……誰？」

「！？……。」

倒れていた男が突然、夜光の顔に触れる。

「人？……何か、可愛い。」

「？！……なっ！……。」

夜光は顔を真っ赤にする。

フラッ

「…ヤバイ…。」

ボタンッ

「おい！おい！！」

男はそのまま眠ってしまった。

パチッ

「ん？…。」

男は目を覚ます。

「…あつ。」

「Zzzzzzz。」

夜光はベッドにもたれて座りながら眠っていた。

「…俺の事を助けてくれたのか…。」

「ん？…あつ起きたのか？」

「……。」

夜光は起きたてでブーツとしていた。

「俺を助けてくれてありがとう」ニコッ

「！？…。」

夜光は寝められて一気に顔を真っ赤にした。

「どうかしたのか？」

「…な、なんでもない。」

「じゃあ、これが俺のお礼だ。」

「！？…。」

男が夜光の唇を塞いだ。

「な、何すんだよ！！！！」

夜光は顔を真っ赤にした。

「別に、俺今日からここに居ていいか？」

「なっ!?!?…。」

「お前、有名人だろう?」

「何でそれを!?!。」

「なんとなく。似てるなあゝつて。」

「!?!?…。」

夜光は焦る様子だった。

「分かったよ。」

「ありがとう」「ニコッ
ドキッ!

「!?!?…。」

夜光は顔を真っ赤にした。

「俺は、すすしろくろみ煤城黒弥よろしくな」

「俺は、時間夜光。」

「うん、じゃあ今日からよろしく」「ニコッ

「…おう。」

4話 黒弥×夜光 2

「あれ？今日は仕事行かないの？」

「行かない。」

「何で？」

「面倒だからな。」

「それだけか？」

「おう。」

「お前素直だな。」

「そうでもない。」

黒弥は朝からゲームをしていた。

夜光は寝転びながら、雑誌を読んでいた。

「マネージャーが迎えに来ないのか？」

「来るけど、電話してくるなって言った。」

「はあ！？なぜだ！？」

「鬱陶しいから。」

「ふん。」

「俺は、別にやりたくてやってるんじゃない。」

「そっか。」ニコッ

黒弥は夜光の頭を優しく撫でる。

「…………。」

「どうかしたのか？」

「なあ、前から思ってたんだけどさ。」

「ん？」

「お前って何者だ？」

「！？……。」

「最初にあった頃、ボロボロだっただろう？」

「…………。」

黒弥は何か悲しい顔をする。

「どうなんだ？」

「…今はいえない。」

「そっか、なら買い物でもいこうぜ!」「ニコッ

「ああ、分かった。」

そして、二人は商店街に向かった。

「…あのっ…。」

「…………。」

「黒弥さん?…。」

夜光はなぜか顔を引きずっていた。

「……ひ、ひ、ひ、人!!。」

「黒弥!お前キャラ崩壊しすぎだろう!!」

「……う…夜光、助けてくださいい」。

ドキッ!

「!?!…………。」

夜光はなぜか、顔を赤くした。

「分かった…。」

「…ありがとう!!」

「!?!…。」

黒弥が夜光に抱きつく。

「なっ!?!…離れる!!」

夜光は顔を真っ赤にさせる。

「で、何買うの?」

「林檎。」

「林檎?…どうして?」

「林檎が喰いたいから。」

「そっか」「ニコッ

夜光は店で林檎を買った。

「…疲れた。」

「有名人なのに、結構ばれないんだね」「ニコッ
「?!...」

周りの人が夜光を見る。

「...ちよつとこつち来い!!...!!」

そして、二人は誰も居ないところに来た。

「ハア...お前な!!」

「何で隠すんだ?」

「!?!...」

黒弥は夜光に顔を近づける。

「本当は男だって、ばらせばいいだろう?」

「!?!...それは...無理だ。」

「なぜ?」

「...俺が...臆病だから...」

「何で、そう思うんだ?」

「!?!...」

夜光は顔を真っ赤にする。

「黒弥...」

「何?」

「顔が...近い!!...!!」

「照れるな。」「ニコッ

「照れてない!!」

「まあ、いつか。帰るぞー。」

「...」

俺は臆病なのか?...まあ、いいや。

プロローグ 3

僕は一人だ。

いつも、いつも。

だけど、笑っていないと。

皆が困る顔をする。

だから、いつも…。

「僕は大丈夫だよ！皆が楽しかったら僕はそれだけで嬉しい」ニコッ

そんな奇麗事、今になれば…。

だけど、ある日出会ってしまった。

僕の本性をはがす男が…。

あきさか あおい
秋坂 葵

18歳の男。

明るくて優しそうに見えるけど本当はとてつもなくネガティブ系。
極度の貧乏人。（ホームレス並）

最強の武道家。

みねぎし きょうすけ
峰岸 京介

21歳の男。

生意気で明るくて結構強引でスッぱい人。
幽と仲良しの小説編集者。

5話 京介×葵 1

僕は極度の貧乏人です。

金が無い。家が無い。服はボロボロ。頭はボサボサ。です。
だから、ただいまホームレス生活？。

「……。」

いつもダンボールの家で空を眺めるのが日課。

「はあ……何してんだろうな。さっさと仕事をして、金をバンバン稼がないと……」

それが無理なんだよなあ、本当に自分ってヘタレでバカで単純。

「

電信柱に、ある一つの貼り紙が貼ってあった。

「誰でも歓迎。武道派の人大集合。」

ホームレスの少年はその貼り紙がやっている場所に向かった。

「優勝した人は……賞金1億円！」ニッ

勝ってやる!!!優勝する!!!絶対に!

そして、目的地に着いた。

「人……多いし。」

人がかなり多かった。

「世界には、武道を知っている人が多いんだね。」

もしかして、僕より強い人居る？それで僕が恥じかかされて負けたらどうしよう？

知り合いのホームレスのじっちゃんに何言われるか…。

「出場する人は、舞台上がってください。」

司会者がマイクを持って全員に言う。

少年は、考えていて聞こえていなかった。

トンッ

「!?!?。」

「お前も参加するんじゃないのか？」

「?!?! えっ!? ああ、はい!! でわ!」

少年は知らない人に声をかけられて慌てて舞台上る。

「おっと、これは若い!」

「えっ? 僕ですか?」

少年は司会者に声をかけられる。

「僕、まだ18歳ですよ?」

「若い子はいいいよ」

「えっと。」

「18歳の君、名前は?」

「…ああ…あきさがあおい秋阪葵です。」

「いかにも女の子の名前だね。」ニコッ

「女の子のなま。」ガーンッ

葵は酷く落ち込んだ。

そつだよねえ、僕は所詮女みたいな顔で女みたいな名前ですよー。

「武道は好きかな? 葵君。」

「好きですよ。強い人と戦えるのが凄く好き!」ニコッ

「おお!?!?! ならば戦ってみますか!?!」

「はい!」

扉からごつい男が二人出てきた。

「……………」

葵の目つきが変わった。

「では！スタートです！」

「おい、ガキ。怪我したくなきゃー帰れ。」

「…そうですか。そんな余裕をしてると怪我しますよ？」

「なんだと！！このガキ！！！！」

葵が男を挑発した、男は葵に殴りかかるが、葵は軽々しくよける。
ダンッ！！！！

「ガハッ！！」

「…僕を甘く見たことを後悔しましたね。」ニッ
葵は一人の男を地面にたたきつけた。

「こいつより、俺の方が強いぞ？チビ。」

「…そうですか。ならさっさと、倒れてくださいよ。」
バタンッ

葵は何もしていないのに、男は倒れた。

一人の男を倒している時に二人目の男にも攻撃したらしい。

「これは…凄すぎます！！」

司会者が、葵の手をつかむ。

バシッ！

「…僕に気安く触らないでくれますか？」
ビクッ！

「！？…。」

司会者は葵の目つきに体が怯えていた。

バシッ！

「！？…。」

「へえ、さっきの奴とは別人だな。」ニッ

「…誰ですか？離して下さい。」

「無理。こいつは俺のお気に入りだな。」

「はあ？何を言ってるんですか？理解不明…とさっさと離して下さい。」

「無理だつて、言ってるだろう？」

「そうですか…なら。」

葵が男の手をつかんで投げ飛ばす。

タッ

「……。」

男は軽々と地面に着地する。

「まあ、いいや。お前、今日から俺の奴隷になれ。」

「…却下。」

葵は即答で応える。

「何で？」

「…僕は帰ります。」

「じゃあ、俺ついて行こう。」

「はあ！？着いてこないでください！！！」

「無理。お前が俺の物になるまでは着いていく。」

「なっ！！！」

なんですか…この鬱陶しい人は…。

5話 京介×葵 1（後書き）

葵って二重人格なのかなあ？？
（作者も分からない葵。w）

6話 京介×葵 2

あの日は、疲れすぎてそのまま寝てしまった。
あの人は多分。まだ帰ってないと思う。

「ん?…。」

パチッ

いつものダンボール。

朝の空はとても綺麗に見えてくる。

「おはよう。」ニコッ

ドキッ!!

「!?!?…うわあ!!!」

「なんだよ、そんなに驚くことか?」

「驚きますよ!いきなり、顔を出さないでくださいよ!?!」

「それは悪かったな。」ニコッ

ドキッ!

「…別にいいですけど。」

葵は頬を赤く染める。

「ああ、そうだ。俺は、みねぎしきょうすけ峰岸京介!よろしくな」ニコッ

「はあ、っていつまで居るんですか?」

「俺の家に住むって言うまで!」ニコッ

「昨日と違うんですけど…。」

「まあ、いいだろう?お前、こんな所に居ても面白くないだろう?」

「別に、面白いとか面白くないとかの問題じゃないんですけど。」

「はあ?何が違うだ?」

「峰岸さんは、仕事してるんですか?」

「してるよ。だけど2日も休んでる。今日も休んでる」ニコッ

「そんなの駄目ですよ!!!行きますよ!?!」

「はあ?」

葵は京介の手を引つ張る。

「どこですか？仕事場。」

「……はあ……。」

そして、二人は無事に編集部に来た。

「ちゃんと、仕事してくださいよ！」

「何？俺の心配？かわいいね」ニコッ

「違いますよ！」

「そっか？」

「じゃあ、僕行きますよ。」

「ああ……そうだ。お礼。」

「えっ？」

グイッ！

「ん！？……。」

京介が葵の唇に自分の唇を重ねた。

「なっ！？……。」

葵は顔を真っ赤にする。

「甘い。」

「はあ！？」

「まあいいや。気をつけて帰れよお」ニコッ

「……。」

葵は顔を真っ赤にして、走って帰った。

京介はしゃがみこんで頭を抱える。

「何してんだろう……俺は。」

京介は頬が赤かった。

「可愛すぎなんだよ……葵^{あいづ}。」

「…うわぁー！最悪！！僕の純情返せ！」

葵はテンションが下がっていた。

「はぁ…。あの人…最悪最低な極悪人…ですよ…。」

葵は顔を真っ赤にする。

何で、こんなにドキドキして顔を赤くしてんだろっ？…。

「僕は…ホモじゃないのに…。」ボソッ

「ん？…。」

葵は、何かを見つけたらしい。

「…雷？。」

「ん？これって、あいつの？」

京介が見つけたのは、綺麗なペンダントだった。

「あいつ、居るかな？？」

京介は葵を追いかける。

「雷世！！」

「ん？葵！」

「久々だね」ニコッ

「お前は、相変わらず、ホームレスか？」
「うん」ニコッ

「だけど、元気でよかった。」

「そっか？僕も雷が元気でよかったよ」ニコッ
「おう」

「葵ー！」

「！？…。」

葵の後ろから京介が来た。

「峰岸さん！？」

「？？。」

「ほら、これ。お前のだろう？」

「あっ！そうです。わざわざありがとございます」ニコッ
ドキッ！

「…別に。」

「雷世。行くぞ。」

「ああ、じゃあ俺行くな！じゃあな！」

雷世は誰かに呼ばれ、そのまま去って行った。

「峰岸さん。仕事に戻らないんですか？」

「俺はお前に借りが出来たぞ？」

「お礼すればいいのですか？」

「そう。」

「何をですか？」

「俺の名前。」

「峰岸さん？の名前？」

「京介って呼べよ。」

「…分かりました。」

「ために呼んで見てくれないか？」

「…きよ…京介。」

「よし、じゃあ俺は行くわ！じゃあな」ニコッ

京介は仕事に戻った。

「…やっぱ、可愛すぎだろう…葵は。」
京介は顔を隠して顔を真っ赤にしていた。

「…今日も一日頑張ろうー!!」

7話 幽×雷世 3

「ハア…ハア…。」

俺は無我夢中で走っていた。

「紅葉！」

「雷世！」

「！？…。」

紅葉は雷世に抱きついた。

「紅葉？…。」

「雷世、俺は…。」

トンッ

雷世は紅葉から離れた。

「勘違いするな。ただ、俺はもうお前と関わりたくないからそれを伝えに來ただけだ！！」

「……ない。」

「えっ？…。」

「俺は、認めない。」

「な…。」

「俺は雷世が好きなんだよ！！」

お前にあの頃告白されてから、ずっと…俺は後悔してた。」

「！？…。」

紅葉は雷世の手をつかむ。

「何で、分からないんだよ！」

「……。」

「もう10年経った。それで俺の事も諦めたのか？」

「俺は、お前に振られてもう諦めた！もう、恋もしないと誓った！
！」

「雷世…。」

「はいはい、話はそこまで。俺の雷世を返してくれるか？」
グイッ！！

「！？…守川！」

「幽だつて。」

「何で？」

「俺、あの時おきてたんだよなあ。」ニッ

「なっ！？…。」

「まあ、まあ。で夜で何かする気なのか？」

「雷世…。」

「…ごめん。」

雷世は悲しい顔をして紅葉に謝った。

「……。」

紅葉はそのまま去った。

「じゃあ、帰るか。幽。」

雷世が帰ろうとするが。

グイッ！

雷世の手を引っ張る幽。

トンッ！

「！？…。」

雷世を壁に押す。

「幽？…。」

「俺にいう事はないのか？」

「べ、別にない。」

幽は雷世に顔を近づける。

「嘘だ。」

「…嘘なんかついてない…。」

雷世は頬を赤くする。

「そうか。」

「…!？」

幽は雷世の唇に自分の唇を重ねた。

「ん!？…。」

雷世が幽を押すがびくともしない。

「ん!!!。」

そして、やっと唇が離れた。

「ハア…ハア…。」

雷世は顔を真っ赤にしていた。

ドンッ!!!!!!

雷世が幽を押した。

「お前…最低だ!!!!」

雷世はそのまま走ってその場を去った。

「…はあ…。」

8話 幽×雷世 4

「……。」

雷世はいつもより、ボーツとしていた。

昨日の夜の事があれば誰でもそうなると思う。

昨日、あの夜。

幽の家に帰って、荷物だけ持って帰って帰ったらしい。

「…最悪。」

雷世は自分の家を散らかしていた。

グウー。

雷世の腹が鳴る。

「買出し…。」

雷世はフラフラに歩いていた。

だけどそんな雷世だけど、一方幽は？…。

「ん？どうかしたのか？守川？」

「別に、って何で居るんだよ、峰岸。」

「俺の用事」ニコッ

「ああ、そうかよ。」

「俺が相談のつてやろうか？同じホモ同士」ニコッ

「ふざけるな！お前みたいなドSやろうに頼れるか。」

「ははは、そうなるかあ」ニコッ

幽はソファのある編集部の部屋でコーヒを飲んでいたら京介がやってくる。

「で、可愛い子と喧嘩でもしたか？」
「…お前って昔から鋭いな。」
「ははは、そうだよ」ニコッ
「はあ…何か不幸だあ。」
「はいはい、だけど頑張れ！」ニコッ
京介は部屋から出て行った。
「……。」

最悪だな…俺も。

ドンッ！！

「痛ッ！…。」

「ああ、ご、ごめんなさい！！」

「ああ、いいよ。別…?!黒弥さん！」

「?!…雷世坊ちゃん！」

雷世とぶつかった人は、黒弥。

雷世の両親と知り合いらしい。よく雷世と遊んでいた仲。

「相変わらずだな」ニコッ

「どうしたんですか？こんな所で。」

「?!…ちよつと、買出し…。」

「坊ちゃん、あんまり買ったものばかりではなく実家から、家政婦をやつたらどうです？」

「…いやだ。俺は一人でも大丈夫だ！そうだ、黒弥が俺の家に来いよ」ニコッ

「ああ、それは無理です。今は知り合いの家に居候させてもらっています」ニコッ

「そっか、仲良くしろよ！分かったな？」ニコッ

「分かってますよ」ニコッ

黒弥と雷世はその後、別れを行って去った。

「…ん？」

雷世は知らないうちに幽が働いている、編集部の建物の目の前に来ていた。

「もう、帰ろう。」

雷世はそのまま買い物をしないで走って家に帰った。

それと同時に、幽が編集部の建物から出てきた。

「…ん？誰か居たような？…。」

幽は雷世と逆の道に向かって歩いて行った。

パンツ！

雷世は小説を閉じる。

「はあ…。」

雷世のため息は一体いつ止まるんでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1379ba/>

本気の初恋

2012年1月12日20時54分発行